参考資料１

伊豆沼・内沼ワイズユースに関する情報交換会について

運営事務局

伊豆沼・内沼を中心としたワイズユースの取組を推進していくため、
①関係者間の合意形成を図りながら、
②各取組が推進されるような情報提供、情報交換及び建設的な話し合いがなされる等の協力体制を構築すること、
を目的として、令和５年度に２回の下記情報交換会を開催した。

【第１回】
日　時：令和５年１０月２５日（水）13 時半から 15 時まで
場　所：伊豆沼・内沼サンクチュアリセンター
議　事：①各主体の伊豆沼・内沼周辺における利用の取組
②課題の共有
メンバー：ワイズユースに関係する協議会員、運営事務局、その他関係機関（裏面参照）
主な意見：
・２市の関係者がより協働して事業を進められる仕組みづくりも必要。
・地域を案内できる地元のガイド育成の必要性を感じる。
・利用者マナーの向上のためにも、利用者サイドのコミュニティから自主的に活動できるような仕掛けができるとよいと考えている。
・参加者が自主的に活動し、経済効果を生んでくれる仕組みも重要だと感じている。
・伊豆沼・内沼ワイズユースについては、すでに関係者がそれぞれ自主的に取り組んではいるが、地域全体として、どのような利用を推進していくのか共通のビジョンを作成できるとよい。

【第２回】
日　時：令和６年１月２３日（火）10 時半から正午まで
場　所：伊豆沼・内沼サンクチュアリセンター
議　事：①各主体の伊豆沼・内沼周辺における利用の取組
②課題共有等
③【情報提供】宮城大学　茅原教授より
メンバー：第１回情報交換会参加者+地元関係者等
主な意見：
・令和７年に伊豆沼・内沼ラムサール条約湿地登録４０周年を迎える。伊豆沼・内沼のワイズユースの取組の推進や、これまでの自然保護の歴史など広く周知するために、この情報交換会などを通じて、関係者で連携していくことを確認。

【第１回参加メンバー】

自然再生協議会 協議会員	有限会社伊豆沼農産
	一般社団法人くりはらツーリズムネットワーク
	登米中央商工会
	栗原南部商工会
	若柳金成商工会
	登米市まちづくり推進部観光シティプロモーション課
	栗原市商工観光部田園観光課
関係部局	東部地方振興事務所登米地域事務所地方振興部
	東部地方振興事務所登米地域事務所林業振興部
	北部地方振興事務所栗原地域事務所地方振興部
	北部地方振興事務所栗原地域事務所林業振興部
自然再生協議会 共同運営事務局	環境省東北地方環境事務所　野生生物課
	登米市市民生活部環境課
	栗原市市民生活部環境課
	公益財団法人宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団
	宮城県環境生活部自然保護課

第２回参加者メンバー

（敬称略）

公立大学法人　宮城大学　事業構想学群	教授	茅原　拓朗
伊豆沼・内沼クラブ		及川　俊弘

参考資料２

令和５年度生物多様性認知度調査（中間結果）

１　実施期間

令和５年１２月～令和６年１月

２　調査方法

①自然保護課で発行する「みやぎの生物多様性マップ」に掲載されている２７施設で、来館者・来園者等に対しアンケートを実施。

②宮城県（自然保護課）HPで閲覧者に向けたアンケートを実施。

③宮城県職員向けに職員掲示板で周知を実施した。

３　サンプル数

施設：７７件、 HP：１６２件

計：２３９件（令和５年１月１１日現在）

4　アンケート項目

Q1　御年齢、お住まいの市町村、御職業について教えてください。

Q2　「生物多様性」という言葉を知っていますか？

Q3　「生物多様性」という言葉から何を思い浮かべますか？

Q4　「ネイチャーポジティブ」という言葉を知っていますか？

Q5　自分が住んでいる地域の「生物多様性」が減少することでどのような影響があると思いますか？

Q6　自分が住んでいる地域の「生物多様性」が近年どう変化していると思いますか？

Q7　豊かな自然のために、普段の生活で実践していることはありますか？

Q8　「生物多様性」について御自由に御記入ください。

5　結果概要

○生物多様性について

・６０％が「言葉の意味を知っている」と回答。(Ｒ４年度調査より10ポイント増加)

・６５％が「住んでいる地域の「生物多様性」が低下したと回答。

○　ネイチャーポジティブについて

・１０％が「言葉の意味を知っている」と回答。

・「聞いたことがある」を合わせ30％弱となった。

○　実践していること、これから行いたい行動について

・８割以上が「地元のものを食べること」「自然とのふれあい」「ゴミを減らすこと」を実践。

・５割以上がこれから行いたい行動として、「エコラベルなどが付いて環境にやさしい商品を選んで買うこと」、「生物多様性に配慮した農林水産物を選んで買うこと」を回答。

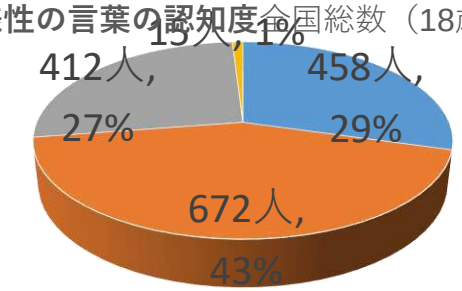
Q2.生物多様性認知度

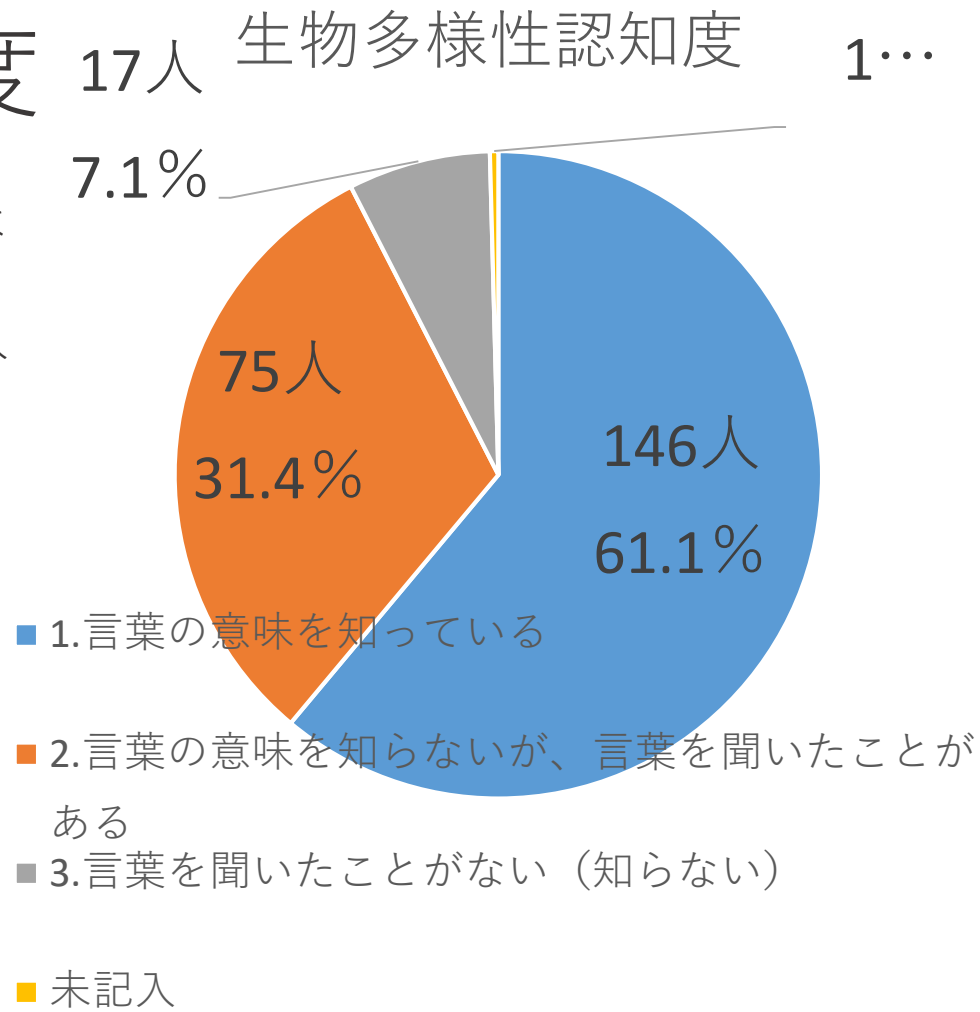
- 宮城県の調査では「言葉の意味を知っている」と回答した人の割合は、Ｒ４年度調査の51％より10ポイント増加した。
- また「言葉をきいたことがない」と回答した人の割合は、Ｒ４年度調査の10.3%より減少し7.1％となっている。

内閣府「「生物多様性に関する世論調査」

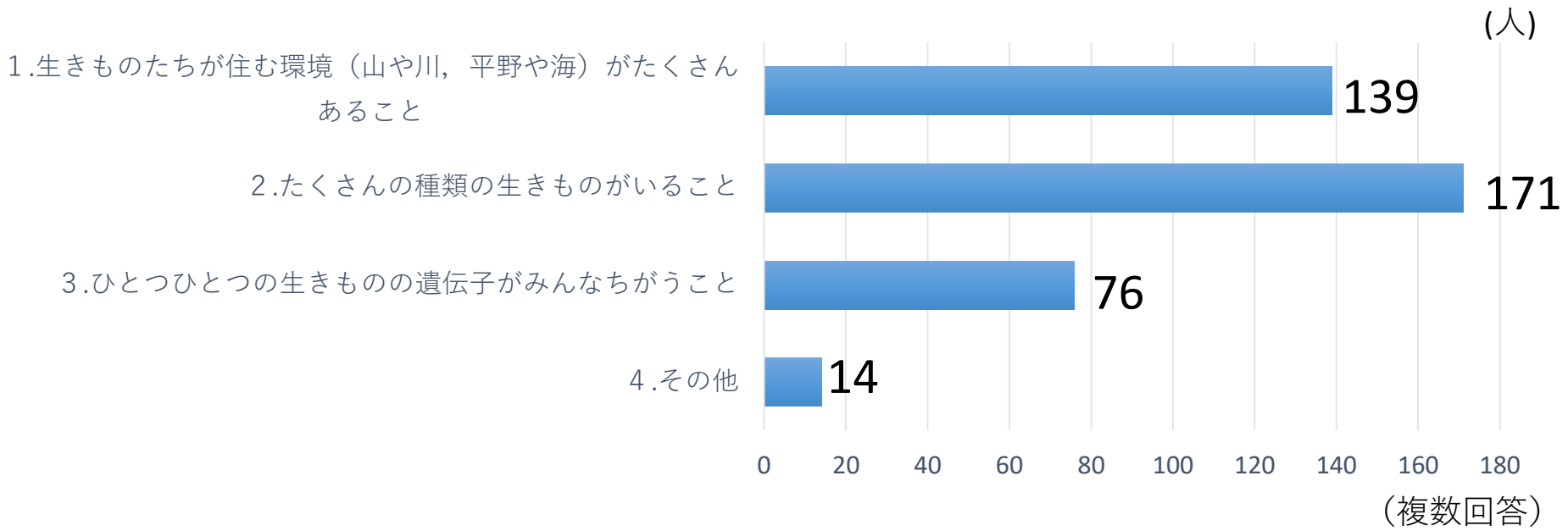
調査期間 令和４年７月21 日 ～ ８月28 日

生物多様性の言葉の認知度全国総数（18歳以上）





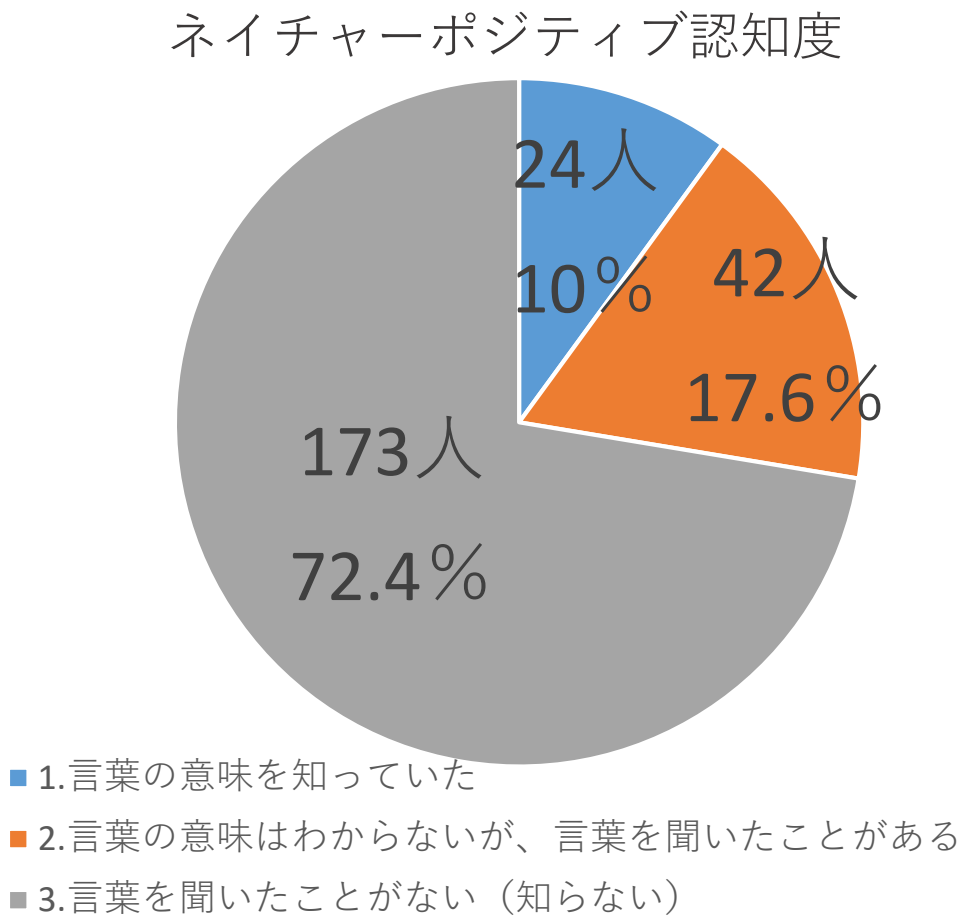
Q3.「生物多様性」という言葉から何を思い浮かべるか



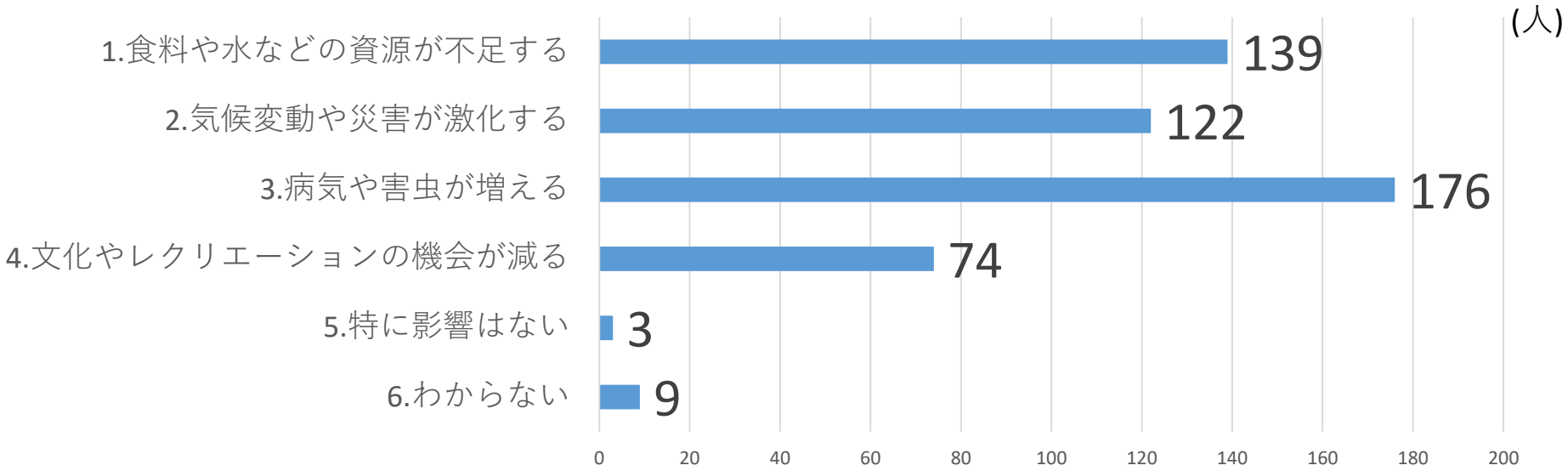
- 生物多様性のイメージは、「種の多様性＞生態系の多様性＞遺伝子の多様性」の順に強くなっている。
- 目に見えづらい「遺伝子の多様性」への理解が進んでいないと思われる。

Q4.ネイチャーポジティブ認知度

- 「言葉の意味を知っている」と回答した人の割合は、10％となっている。
- 「知っている」、「聞いたことがある」を合わせると30％弱となっている。
- 「言葉をきいたことがない（知らない）」と回答した人の割合は、72％ほどになっている。
- 施設に設置したアンケート結果の追加により数値の変動が予想される。



Q5.「生物多様性」が減少することで どのような影響があると思うか

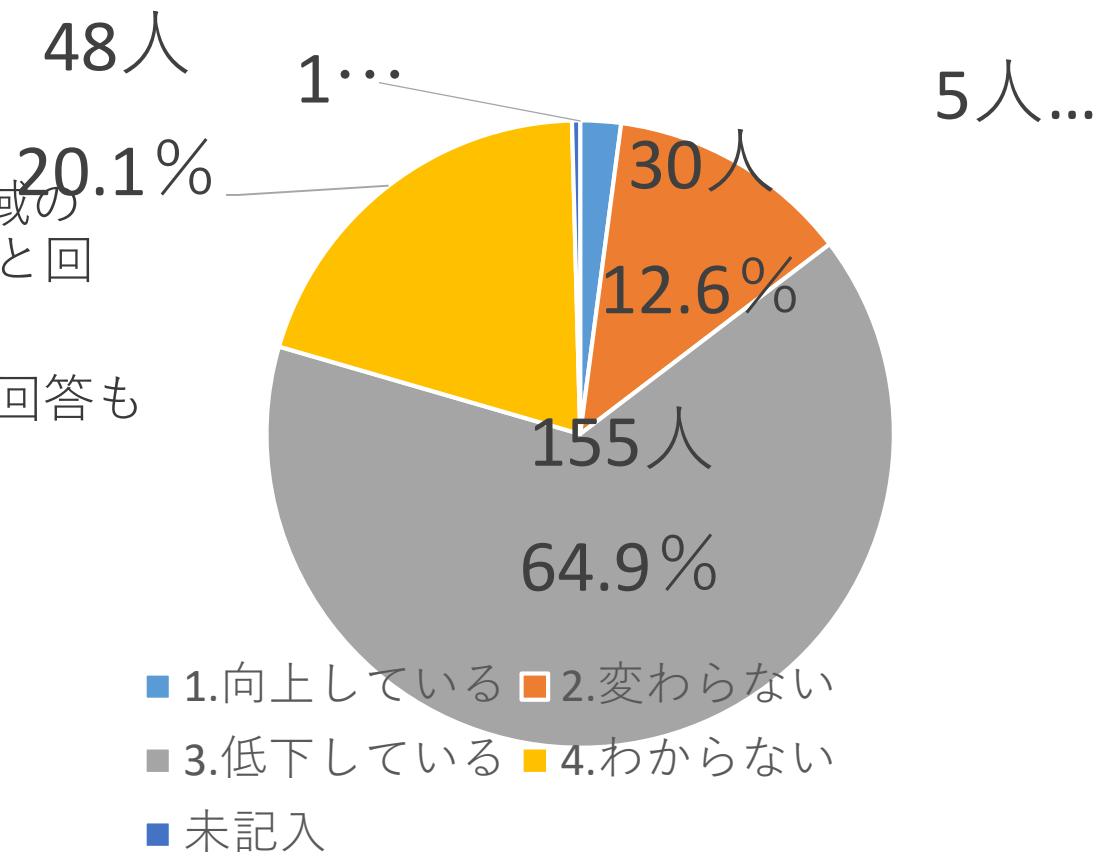


（複数回答）

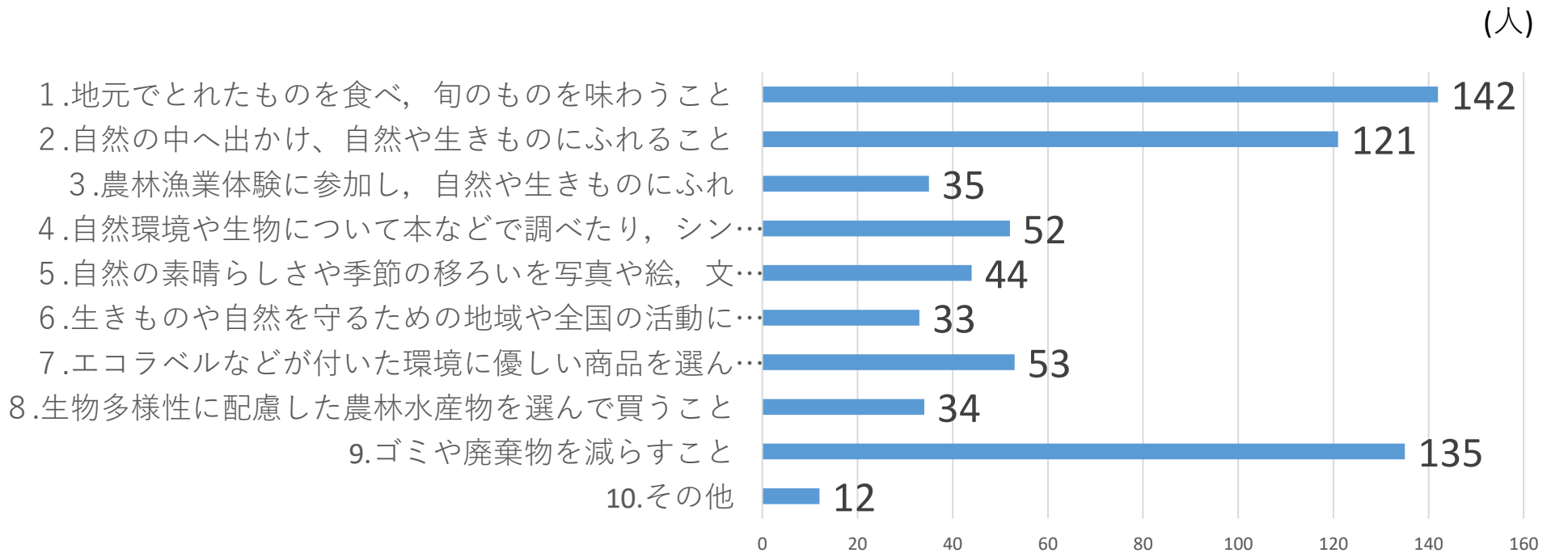
- 多くの人が影響があると回答し、「病気や害虫が増える」が一番多くなっている。
- 「文化やレクリエーションの機会が減る」についてはその他の影響とは低い結果となっている。

Q6.地域の「生物多様性」が近年どう変化していると思うか

- 64.9％の回答者が住んでいる地域の「生物多様性」が低下していると回答。
- 次に多い「わからない」という回答も20％ほどになっている。



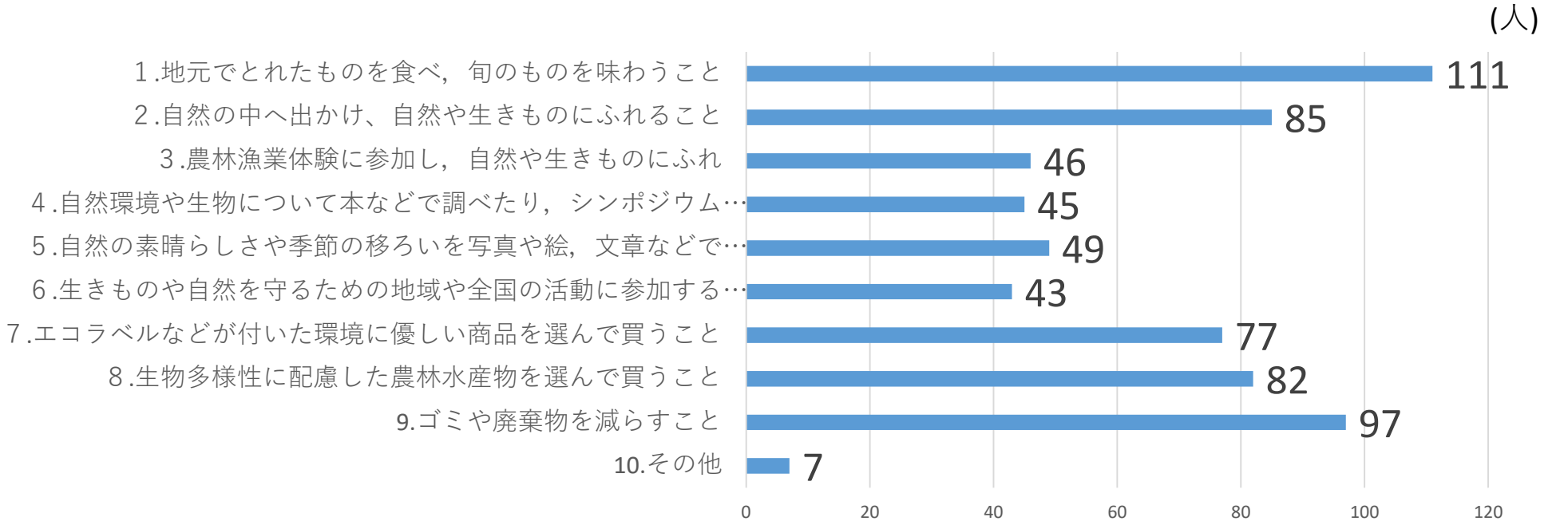
Q7.普段の生活の中で実践していること



（複数回答）

- 昨年度と同様に「ふれること」「味わうこと」、今年度追加したゴミや廃棄物を減らすなど、比較的取り組みやすいもの、わかり易いものの回答数が多い。
- その他の項目も昨年度と同様の傾向が見られている。

Q7-2.これから行いたいと思う行動



（複数回答）

- これから行いたい行動としては、普段の生活で行っていることと同様の傾向が見られている。
- 「エコラベルなどが付いて環境にやさしい商品を選んで買うこと」、「生物多様性に配慮した農林水産物を選んで買うこと」については、普段の生活で行っていることよりも高い傾向が見られている。